

AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報 第28号

空中回廊

この企画展はピリ辛テイスト [アヴァンギャルド・チャイナ]
/ 会員のひろば / 愛知県美術館コレクションから
[モディリアーニ《カリアティード》] / 友の会活動紹介



アメデオ・モディリアーニ《カリアティード》1911-13年

○この企画展はピリ辛テイスト○

アヴァンギャルド・チャイナ ―〈中国当代美術〉二十年―

2009年4月3日(金) から 5月24日(日) まで開催

昨年の北京オリンピックの華やかさにタイミングを合わせるように、東京の国立新美術館で開催され、その過激さに多くの人々が驚かされました。その後、大阪の国立国際美術館を経て、ついに愛知県美術館にやってきます。中国の作家たちのアヴァンギャルドの世界をぜひその目で確かめてください。

.....アヴァンギャルドって一体.....

中国の美術というと水墨画？ という人も多いようです。ですから中国の「アヴァンギャルド」と言われても、なかなかイメージが浮かんできません。ヨーロッパでは抽象主義やシュルレアリスムでさえ前衛芸術だったし、日本でも数十年前に流行しました。軍隊用語で、敵の攻撃への先頭に立つ者という意味ですが、敵対する社会が見えにくくなったことなどから、この言葉は「死語」になっていきました。

しかし、中国ではこの数十年において、改革開放路線により外国の文化が急激に取り込まれ始めました。北京オリンピックなどからわかるように、経済的にも大きく変化してきました。芸術面でも、デュシャンやラウシェンバーグなど、20世紀の現代美術を一気呵成に取り入れ、短期間で世界的に評価されるレベルに達しました。中国では「前衛芸術」が現在形で熱をもっているのです。

今回の展覧会では、中国国内で制作された80年代半ばからの作品に限定されているので、早くから海外で活躍している作家では、初期の作品が紹介されています。

写真①は、コン



①黄永砵《『中国绘画史』と『現代绘画简史』を洗濯機で2分間攪拌した》1987年

ーティストとして、1989年以降フランスで活躍中の黄永砵（ホアン・ヨンピン）の作品です。中国と西洋の絵画史の書籍を、洗濯機でかき混ぜ、一つの塊とした作品。それまでの閉ざされた中国の美術と世界的な現代美術を混ぜ合わせ、割れたガラスの上に乗せてあるのを見ると、あたかも当時の中国の美術界が置かれたカオス的な状況が表現されているようです。

.....シニカル・リアリズムの絵画たち.....



② 張曉剛《血縁：大家族之四》1995年

張曉剛（ジャン・シャオガン）の作品（写真②）は、2メートルを超える大きなものです。今やこの作家の作品は、世界の美術市場で、億単位で取引されています。「毛沢東を父とする家族」から、政治の変革に奔放されつつも支え合う「本当の家族」に変わろうとする人々への、温かいまなざしを感じさせる作品になっています。母親の若い頃の顔写真と作者の同じ頃の顔写真により「家族」について考え直そうとする姿勢が感じ取れます。彼は2005年の映画「胡同のひまわり」の主人公のモデルとされています。この映画は、近代化によって失われていく北京の古い街並み「胡同」と、そこに生きる画家親子の互いの反発や愛情を描いた物語で、サンセバスチャン映画祭で最優秀監督賞を受賞した作品です。

方力鈞（ファン・リジュン）も世界的に評価さ



③ 方力鈞《シリーズ2 No3》1992年

れている作家です。薄笑いを浮かべ、同じ格好の男達の不気味さは、印象的で忘れられません（写真③）。始めは下卑た薄笑いのようにでしたが、彼が呑み込まれてきた政治や社会への諦めが、潜んでいるようにも思えました。どのように考えるか、感じるかは、ご自由に…

.....インスタレーションの展示は大変らしい……

今回の展示はインスタレーションや映像による作品も多く、映像機器や電気の配線なども大変だと伺いました。

孫原（スン・ユアン）と彭禹（ポン・ユウ）は、死骸や動物自体を素材にする「死体派」と言われる過激なユニット作家です。作家のウェブサイトで見ると老人のリアルさに驚きました。車椅子に乗った老人達は動かずに機械に任せて移動しているのです（写真④）。作家の発想もさることながら、準備もとても大変なようです。



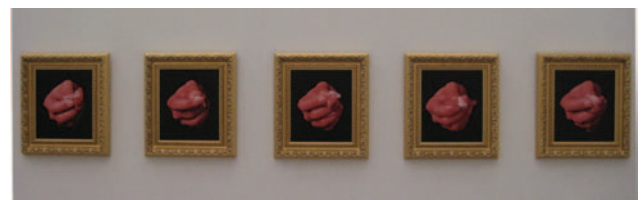
④ 孫原・彭禹《老人ホーム》2007年 展示準備中（国立新美術館）

楊福東（ヤン・フードン）のビデオ・インスタレーションの準備風景の写真も見せて頂きまし

た（写真⑤）。パノラマ状に並ぶ8つの画面に映る美しい映像と澄んだ音楽によって、時間の感覚が消えていくような作品になっています。



⑤ 楊福東《断橋無雪》2006年 展示準備中（国立新美術館）



⑥ 顧徳新《1984年8月24日》1984年 展示準備中（国立新美術館）

写真⑥は顧徳新（グ・ダージン）の写真作品です。以前は会場にあるクーラーボックスに生肉を入れて嗅覚や触覚にまで訴える実験的なインスタレーションを行っていたそうです。この写真は、肉片をひたすら揉み続けるという行為を、機械的にシャッターが切れるようにして捉えたもので、生肉の感触と金ぴかの額がいかにもミスマッチに見えます。

.....国立美術館とのタイアップ…マッチアップ？

本展覧会は、中国の現代美術の紹介もさることながら、2つの国立美術館と、愛知県美術館という、今までにあまりないタイアップが大きな特徴です。外国では評価されていても、中国国内ではなかなか公的に認められない現代美術。それを借りてきて展覧会を開くのは、並大抵の苦勞ではなかったようです。ここに掲載するのはチョット…という作品もあります。ピリ辛な新しい中国の芸術を味わってみてください。（小林克敏）

※この記事は本展覧会を担当される古田主任学芸員へのインタビューを参考に構成しました。

○会員のひろば1○

懇親会

他館鑑賞会／公開シンポジウムサポート

◎懇親会

2月25日、美術館と同じフロアにあるレストラン「ウルフギヤング パック」で、友の会の懇親会が開かれました。

懇親会は、会員どうし、また、会員と学芸員とが、食事、飲み物（もちろん酒類も）を囲みながら気軽に話せて楽しく交流できる場として、毎年恒例の行事です。当日は50名近い会員に加え、館長はじめ美術館関係者も出席されました。会の途中、友



の会理事や学芸員を紹介する「イベント」や、「豪華賞品」をかけた抽選会もあり、大盛況でした。

もう何年も友の会にいる会員は、顔なじみの会員を見つけてはお酌しあっていました。一方で、初めて参加された方もほかの会員や学芸員をつかまえて積極的に話しかけていました。思い思いに、友の会仲間の「輪」を深め、広めあえたとのことで、参加者の評価も上々です。

私も知らなかったのですが、他館の「友の会」では、学芸員と何でも話せる懇親会のようなイベントはあまりないそうです。懇親会にはこれまで何度も参加しましたが、県美術館友の会ならではのイベントだったと知ると、来年以降も欠かさず参加していこうという思いが強まりました。

(森 健次)



左から大島学芸員、深山主任学芸員、副田学芸員、近藤学芸員、中村学芸員



左から竹内副会長、太田会長、長谷川理事、油田監査役、荻野理事

懇親会と同日、初めての友の会会員限定の所蔵作品展鑑賞会が開催されました。所蔵作品展鑑賞会の開催は、昨年6月の総会で会員から提案されたもので、美術館のご協力により実現しました。今回は深山主任学芸員に、私たちにおなじみの所蔵作品をはじめとする展示作品を解説していただきました。今後も会員の皆さんからのご意見ご要望をお待ちしています。



◎他館鑑賞会 碧南市藤井達吉現代美術館「感じる鼓動、人形展」に参加して

2月14日（土）友の会は名鉄三河線に乗って碧南を訪ねました。この美術館の館長は前愛知県美術館副館長の本本文平氏であり、友の会としては特に親しみを感じています。今回の展覧会は、東京国立近代美術館工芸館所蔵の「感じる鼓動、人形展」でした。彫刻と違ってあまりなじみのないものと思ったのですが、その表現の素晴らしさに引き込まれました。鹿児島寿蔵、



藤井達吉現代美術館の本本文平館長(右から6人目)と一緒にパチリ



藤井達吉現代美術館の浅野学芸員(写真右)より解説を受ける

平田郷陽、堀柳女ら重要無形文化財保持者の作品も数々あり、小さな作品の中に盛り込まれた作者の想いを受け止めようと目を凝らしました。友の会参加者は11名で、浅野学芸員の丁寧な説明に聞き入っていました。

美術館の建つ場所は大浜地区とあって由緒ある古い寺々のある景観地区で、またゆっくり訪ねたい場所です。
(宮崎玲子)

◎公開シンポジウム「作品をまもり、つたえる美術館」のスタッフとして

友の会では、会員が様々な形で友の会および美術館主催行事のサポートをしています。昨秋美術館主催の公開シンポジウムのサポート依頼がありました。参加会員の声も交えてご報告します。

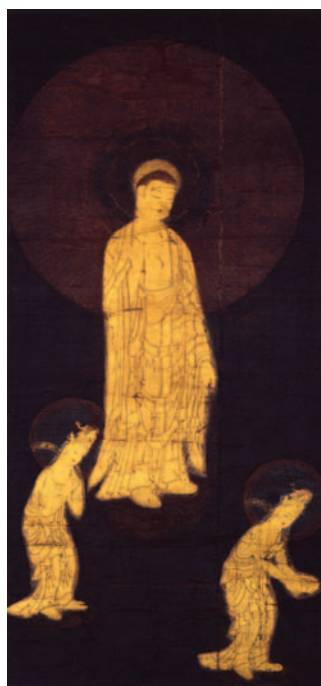
がってきたことなどを学びました。

長屋学芸員が準備された段取りに従い、会場準備、講師サポート、3ヶ所での受付、質問用紙の回収、アンケートの回収、



会場後片付け、会場撮影、録音テープ起しなどを12名のスタッフでサポートさせていただきました。
(武藤和子)

昨年10月25日、木村定三コレクションの仏画《阿弥陀三尊来迎図》の修復をめぐっての公開シンポジウムが開催され、友の会会員もスタッフとして参加しました。



《阿弥陀三尊来迎図》

三浦定俊先生、半田昌規先生、谷口耕生先生を講師にお迎えし、この仏画がいつ頃の作品で歴史的にいかにか貴重な作品であるかとか、修復の過程で浮かび上

サポートスタッフの感想

【受付】 一般申し込みの方の受付をお手伝いさせて頂きました。遠方からのお客様に驚き、出席率が高いことを嬉しく思いました。

(伊藤淳子)

【講師サポート】 講師の先生方が、控室でもそれは熱心に来迎図の顔料、修復過程などについて話し合われる場面に接し、作品の本質を知る大切さを再認識しました。
(森本則子)

特集 所蔵作品管理サポート活動の足跡 〔「お針」仕事以外のグループ編〕

27号に引き続き所蔵作品管理サポート部会の活動をご紹介します。今号では『「お針」仕事以外のグループ』に焦点をあて、27号と同じく長屋主任学芸員（保存担当）にその活動内容を紹介していただきました。



● 継続 主任学芸員 長屋 菜津子

27号では「お針子グループ」のことを書かせて頂きました。今回は「お針」仕事以外を取り上げます。愛知県美術館の所蔵作品を管理、研究、運用するのが美術課です。企画チームが「瞬発力」を求められる仕事であるとするならば、美術課はまさしく「継続」してこそという仕事ばかりです。美術館を美術館たらしめる真の力の蓄積に、こんなにも多岐にわたるサポートをいただいております。

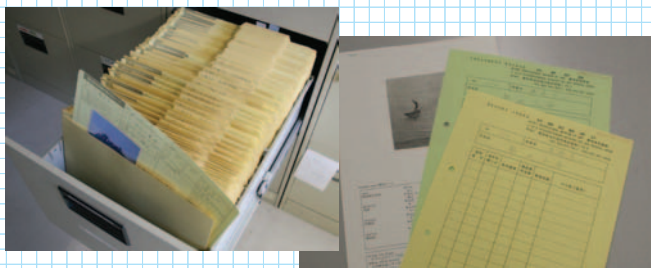
● 『伊勢物語』に挑戦しています

友の会の所蔵作品管理サポート活動は「お針子グループ」と並んで、地味ですが所蔵品の保管整理のための書類やカードの作成などがあります。昨年は杉本健吉展のために、寄贈された『新平家物語』挿絵の整理を手伝い、展覧会への形に残る作業となりました。

今度は寄贈の木村定三コレクションの中から『伊勢物語』（烏丸光廣本）の書き写し、解読に取り組んでいます。物語そのものは『源氏物語』より古く、この写本も江戸時代の古書とあって古文書の世界です。慣れない変体仮名、くずし字で書かれており、難行苦行ですが、若い頃学んだ古文の勉強に再挑戦。グループ有志で手分けしてじっくり解いていく「頭の体操」になっています。
(荻野 孝)



杉本さんのラベル類作成 愛知県美は故杉本健吉氏のご遺族より約1000点の遺作を受贈いたしました。展覧会開催までに必要な、整理用名札やラベル作りといったものや、目録作成に必要な、文字情報の転記や発表原稿との照らし合わせ等をしていただきました。



作品カード・フォルダー整理 所蔵作品には必ず、作品台帳（人間という戸籍台帳のようなもの）と、状態調査が作られ専用のフォルダーに収められます。このフォルダーの名前書きや、台帳や調書の名前入れ、転記、スタンプ押しなどもお願いしています。



伊勢物語勉強会 このサポート部会のお仕事は地味で根気のいることばかりです。同じような仕事ばかりでは申し訳ないので、時には皆で楽しく勉強ができるようなことをとを考えました。今は修理で『入院中』の烏丸光廣の伊勢物語の文字起しをお願いしています。

(解説：主任学芸員 長屋 菜津子)

○愛知県美術館コレクションから一深く知ると、もっとみえてくる○

モディリアーニ 《カリアティード》

(編) ここでご紹介する所蔵作品《カリアティード》を、本会報表紙に掲載しました。

モンパルナスの哀愁の画家、モディリアーニ。伝説に彩られたこの画家の二つの展覧会(注)が、昨年日本を巡回したのは記憶に新しいでしょう。どちらの展覧会にも共通していたのは、画家につきまとう神話を払拭し、作品の芸術性を問い直すことを目的としていたということです。このようにモディリアーニの芸術の真価を改めて問うとき、「カリアティード」をテーマにした作品群は非常に示唆に富むものです。

カリアティードとは、ギリシャ時代以降建築の柱に用いられた女性の人体像です。このカリアティードを彫刻で制作するため、モディリアーニは習作を何枚も描きました。10代の頃からイタリア各地で古代をはじめあらゆる時代の彫刻を見てきたモディリアーニは、パリではルーヴル美術館、ギメ美術館、トロカデロ人類博物館でエジプト美術やカンボジア、インド、中国の仏像など東洋美術を見出しました。彫刻として構想されたカリアティードには、そうした非西洋美術の影響が色濃く表れています。所蔵作品のカリアティードの左目は瞳がなく塗りつぶされていますが、この造形から、たとえばベルリンの国立博物館蔵の有名なネフェルティティの胸像を想起することができるでしょう。丸い胸やくびれた腰、豊満な下半身、首や腰の装飾の表現は、インド美術の女神像とも類似しています。またカリアティードは、インド美術やモディリアーニの故郷に馴染み深いテラコッタのような赤茶色で描かれ、この色調は後に描かれる赤褐色に沈んだ人物画にも反映されています。

モディリアーニが実際に制作した彫刻(図1)は、故郷リヴォルノの北にある都市カラーラの砂岩を直彫りしたものです。ミケランジェロに心酔していたモディリアーニが、この巨匠に倣って選んだ直彫りの方法では、石から掘り出す像をあらかじめ立体的にイメージしておく必要があります。そのイメージを具体化するため、モディリアーニは数多くのデッサン(図2)を描きました。これら

のデッサンでは、輪郭線がカリアティードの量感を見事に引き出しています。こうした線描の訓練が、モディリアーニ特有の引き伸ばされた人物表現にも活かされています。

このように、モディリアーニの作品は自国で培われた地中海の文化と風土を礎とし、豊かな知識と地道な探究に裏付けられていることが分かります。よく知られているモディリアーニの作品は肖像画であり、鑑賞者は描かれた人物の背景にドラマを求めがちですが、その独特な人物画スタイルの確立へつながら「カリアティード」に、伝説に惑わされることなく、画家の芸術の本質を認めることができるでしょう。

(学芸員 森 美樹)



図1 《カリアティード》1914年頃
石、ニューヨーク近代美術館



図2《建築物の台座の上に右膝をつくカリアティード》
鉛筆、紙、ポール・アレクサンデル・コレクション

(注)「アメデオ・モディリアーニ展」(名古屋市美術館、姫路市美術館、2008年4月～8月)、「モディリアーニ展」(国立新美術館、国立国際美術館、2008年3月～9月)

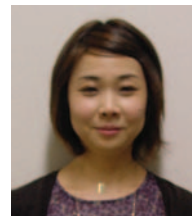
■学芸員の横顔

森 美樹 (もり・みき)

愛知県美術館学芸員

フランス近現代美術専門。2004年より現職に就く。「ロートレック展 パリ、美しき時代を生きて」、テーマ展「松藤孝一 湛える宙」などを担当。

趣味は旅行。





AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

■ 理事会から

■ 新規会員募集活動中！

前号での会長発言をもとに「ファイニング展」「ワイエス展」において会員拡大を目指して、会長はじめ有志で募集活動を行いました。美術館チケット売り場前にて、チケットを購入しようとする皆さんに「友の会」入会を呼びかけました。（陰で「キャッチセールスマがい」と言われています。）「友の会」会員の経済性？を強調して勧誘しました。その結果、毎回数名に入会いただいております。入会してくださった新規会員の皆さんにはお礼申し上げます。

この活動中に知ったのですが、企画展には遠方からの来訪者がかなりあります。（北海道の人もいました。）もちろん、会員にはなってもらえませんが…。また「友の会」の存在もあまり知られていないようです。声を掛けられる人数には限りがあり、来訪者全員に「友の会」をご案内できないのが残念です。今後も機会を見つけて活動しますので、経験者・希望者は是非ご協力ください。そして、既存会員の皆さんには継続はもちろん、新規会員の紹介もよろしく願います。

友の会サポート担当理事 大野 三郎

■ 友の会活動紹介

「ライオネル・ファイニング展」

- 10月 特別鑑賞会(昼・夜)
- 10月 公開シンポジウム(仏画修復) サポート ★
- 11月 テーマ展作家レクチャー&ギャラリートーク
松藤孝一「湛える宙」展 ☆
- 11月 所蔵作品展鑑賞会
- 11月 講座 ガンダーラとパーミヤンの美術(宮治氏) ☆
- 12月 所蔵作品展鑑賞会

「アンドリュウ・ワイエス展」

- 1月 特別鑑賞会(昼・夜) ☆
- 2月 他館鑑賞会(碧南市藤井達吉現代美術館) ★
- 2月 会員限定 所蔵作品展鑑賞会 ★
- 2月 懇親会 ★

定例活動

- 美術館モニター のべ2回
- 所蔵作品管理 のべ13回 ★
- 所蔵作品の台帳作成補助
- 木村コレクションの風呂敷修復手入れ
- 白絹・ビロードのクッション製作
- 伊勢物語勉強会、さらしなどの洗濯
- 発送 のべ2回
- 受付 のべ8回
- 会報発行 第28号発行
- ホームページ 随時更新

★中面で紹介 ☆裏面で紹介



◀……………◎美術講座◎

静岡県立美術館館長の宮治昭先生に、ガンダーラとパーミヤンの美術について調査の様子や遺跡の状態などを講演していただき、中央アジア美術が現在おかれている状況を考えさせられました。

◎テーマ展「^た湛える宙」GT◎……▶

部屋に入ると、そこかしこにいる銀色のかわいい蝶が目をはきまします。その蝶を見ている赤ちゃんは、興味あるものを真剣に見つめる生後半年の姪と同じ姿でした。これも作者(写真右)の「あわい記憶」にある表情の一つなのでしょうか…。



◀……………◎特別鑑賞会◎

新日曜美術館に出演された高橋美術課長の解説で作品完成までの過程を興味深く鑑賞しました。県美に《氷塊》を寄贈していただいたワイエス氏は、残念ながら1月16日逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

…………… これからの企画展のご案内 ……………

アヴァンギャルド・チャイナ

4月3日(金) → 5月24日(日)

生活と芸術—アーツ&クラフツ展

6月12日(金) → 8月16日(日)

放課後のほらっぱ—櫃田伸也とその教え子たち

8月28日(金) → 10月25日(日)

日本の自画像—写真が描く戦後1945-1964—

11月6日(金) → 12月13日(日)

友の会入会のご案内

友の会の詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は、下記までお問合せ下さい。

●10階愛知県美術館受付

●友の会事務局(火・木・金・土 10:00-16:00)

052-971-5511(代) 内線347

tomonokai@aac.pref.aichi.jp

編 集 後 記

美術館には、何を求めて訪れるのでしょうか？私は何かに出会い何かを忘れるために来ていましたが、回を重ねるごとに、観ているものの背景を知りたくなりました。この空中回廊が、読んでいる方々にとっての出会いを、サポートする場となりますように。(松下)

□編集 水野愛子/平松章子/森健次/中田賢/折戸祥子
中塚千佳/松下智子/宮崎玲子/小林克敏/大矢真美代

□協力 愛知県美術館企画業務課

□発行 2009年3月

愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2

愛知芸術文化センター内

TEL: 052-971-5511(代)内線347

FAX: 052-971-5617

E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp

美術館HP: http://www-art.aac.pref.aichi.jp